

## 第9回（平成27年度）栃木県元気な農業コンクール経営活性化部門 受賞者の経営概要

◎ とちぎ元気大賞（農林水産大臣賞・栃木県知事賞）

◆ 株式会社大島カルチファーム（矢板市・土地利用型）

### 1 受賞のポイント

水稲・麦・大豆・そばを中心とした土地利用型の大規模経営を行うとともに、自社生産物をおこわ、饅頭、団子等に加工し、6次産業化に取り組むなど、独自の販売方法の実践が高く評価された。また、環境保全会の活動をリードするとともに、農地保全のため耕作放棄地を積極的に借り受けるなど、地域農業の維持管理に大きく貢献している。



### 2 経営の特色

#### (1) 経営の発展経過と現況

昭和41年に水稲単作経営で就農後、麦や大豆を導入しながら、矢板市を中心に4市町にまたがり農地の集積を行い、徐々に経営を拡大してきた。規模拡大に際して、機動力を確保するため農業機械の台数を増やし、効率的な作業ができるよう図ってきた。平成25年に株式会社大島カルチファームとして法人化し、加工施設を整備するとともに、経営面積は100haを超え、現在、さらなる経営規模拡大に向けた設備投資を行っている。

#### (2) 生産技術について

土づくりを積極的に行い、良質な堆肥を投入して化学肥料の使用量を減らすことで食味・品質の向上を図り、水稲ではカバークロープに取り組み、減化学肥料・減農薬栽培を行っている。また、自家製温湯消毒種子・自家製育苗培土・プール育苗等で省力低コスト化を図るとともに、安全・安心な米、大豆を消費者に届けるため、調整では色彩選別機を導入し、徹底した選別と異物除去を実施している。

#### (3) 労働と生活について

平成24年には食堂や空調を完備した事務所を建築するとともに、社会保険を完備し、従業員が安心して働ける環境を整備している。また、地域への貢献と共生のため、境林グリーン環境保全会の代表として約10年間、草刈りや排水路・用水路の維持管理など、農地水事業等に従業員と共に積極的に取り組んでいる。



#### (4) 販売の工夫について

6次産業化の取組として、平成26年から自社の加工施設において、自社生産物を用いた弁当、おこわ、饅頭、パン、漬け物等の加工品を製造しており、地元道の駅や農産物直売所等で販売している。加工販売を行っている現在でも、各地の道の駅の視察等を積極的に行い、常に新たな商品開発に努めている。また、米は減農薬・減化学肥料栽培の「リンク・ティ」の認定を受け、特別栽培米として高付加価値化を図り、スーパーや食堂への直販と、インターネットでの販売にもつなげている。さらに、そばでは農業体験を通して、地元のそばのPRと消費者との交流を図っている。

◎ とちぎ元気大賞（農林水産大臣賞・栃木県知事賞）

◆ 新井 吉隆 氏・みつ子 氏（真岡市・園芸）

## 1 受賞のポイント

いちごにおいて大規模経営を行いながらも、高い技術による栽培を実践し、単収・所得ともに高いレベルにある。夜冷育苗に早くから取り組み、10月下旬からの安定出荷を実証して年内出荷量を確保するとともに、最新設備を導入し、さらなる単収向上を実践している点が高く評価された。また、雇用導入やラッピングマシンによる作業環境の改善、省力化にも積極的に取り組んでいる。



## 2 経営の特色

### (1) 経営の発展経過と現況

昭和49年に就農し、水稲・いちご・玉ねぎの複合経営からいちごの規模を拡大し、いちご中心の経営を進めてきた。昭和62年には「夜冷育苗」に地域の仲間とともにいち早く取り組み、技術を確立することで年内出荷量を確保してきた。また、当時新品種であった「とちおとめ」や、新技術を積極的に導入しながら規模を拡大するとともに、労力の軽減と快適な労働環境の整備のため、省力化の設備や農業機械も導入していった。現在では123aの大規模経営に至っており、県内でトップクラスの単収と販売金額となっている。

### (2) 生産技術について

長期間にわたる安定的な連続出荷を実現するため、クラウン部局部冷却や地中暖房などの先進技術を導入するとともに、炭酸ガス発生装置等の導入により果実品質の維持・向上を実践している。また、製品率の向上と省力化への取り組みとして、ラッピングマシンや特殊販売規格の導入などを進め、さらに天敵の導入や育苗時の管理を徹底することで病害虫の発生を抑えることにより化学農薬の低減を図るなど、環境保全型農業も実践している。

### (3) 労働と生活について

従業員と作業に入る前のミーティングを欠かさず行うことで、仕事の段取りの確認や共通理解を深めることにつなげている。また、労働内容の質と精度向上のための実習も定期的実施している。忙しい中であっても、妻や後継者との役割分担について見直しと改善を継続し、家族全員が経営にやりがいを持てる環境づくりと、ゆとりある農家生活の実現を目指している。



### (4) 販売の工夫について

実需者ニーズに応えるため、基本技術を徹底するとともに、品質と数量の安定度から、収益性の高い特殊販売規格の出荷に組み込み、有利販売につなげている。また、生産者として販売戦略や販売方法の検討の際には積極的に意見を出し、はが野のいちごブランド力向上を目指している。

◎ とちぎ元気大賞（農林水産大臣賞・栃木県知事賞）

◆ 有限会社大柿畜産（宇都宮市・畜産）

1 受賞のポイント

養豚経営において自社ブランド豚「みや美豚」を立ち上げ、地元スーパーと取引するとともに、嗜好と需要に応じた豚肉の提供、食肉加工設備の整備など、販売の工夫に積極的に取り組んでいる点が高く評価された。また、改善意欲の高い有志によるベンチマーキンググループに参加し、自らの経営の特徴や技術レベルを明確にすることで、コスト削減や生産性の改善に結びつけている。



2 経営の特色

(1) 経営の発展経過と現況

栃木県畜産試験場（現 畜産酪農研究センター芳賀分場）で養豚に関する研修を受け、昭和 50 年に就農。本格的な養豚経営を行うため、豚舎の改良を加えつつ、徐々に規模拡大を図るとともに、それに伴う労働時間の増加を、機械化を進めることで省力化していった。平成 18 年に企業的な養豚経営を目指し、有限会社大柿畜産として法人化した。後継者は、大学卒業後に他県の先進養豚農家で 1 年間の研修を行ったほか、アメリカでも研修を積み、人工授精技術等を習得し、現在では経営の柱として繁殖や飼養管理等、主要な管理を担当している。

(2) 生産技術について

良質な肉豚の生産のために、なるべくストレスをかけない飼養管理を行う他、繁殖成績を高めるため、人工授精施設には冷暖房を完備するなどし、きめ細やかな管理ができるようにしている。技術・経営の改善状況については、ベンチマーキンググループに参加し、生産・収益上の各種構成要素を比較して経営の特徴を明確にしている。自らの経営レベル・技術レベルを明確に順位付けして比較することで、単位当たりのコストや生産性の改善と向上につなげている。

(3) 労働と生活について

肥育と離乳用のウィンドレス豚舎を新設し、曜日を決めて人工授精等の繁殖管理を行うウィークリー養豚を行うことで、計画的な労働が可能となり、休日の確保や趣味の充実につなげている。一方、各種部会等の役員となるほか、後輩の育成に尽力するなど、地域活性化にも積極的に取り組んでいる。



(4) 販売の工夫について

顔の見える生産と消費を目指し、自社ブランド豚「みや美豚」を立ち上げ、地元スーパーのオリジナルブランドとして販売している。また、JA 全農とちぎのブランド豚「とちぎゆめポーク」にも参画し、肉質の異なる 2 つのブランドを扱うことで、嗜好の異なる消費者に対応でき、満足度を高める取引を実現している。また、ハムやソーセージ等の食肉加工用の施設を整備し、消費者による加工体験や 6 次産業化も進めていく予定である。

## ○ とちぎ元気賞（知事賞）

### ◆ 黒崎 文雄 氏（芳賀町・土地利用型）

#### 1 受賞のポイント

水稲・麦・そばを中心とした経営を行っており、特に水稲では作業の効率化と適期作業のため複数品種を栽培し、どの品種においても高品質・多収を実現、地域のモデルとなる安定的な経営を実践している点が高く評価された。また、地域農業環境の維持・整備に積極的に取り組み地域農業に貢献するとともに、ほ場管理や労務管理にICT技術を活用するなど、新たな取り組みによる効率化、省力化を行っている。



#### 2 経営の特色

##### (1) 経営の発展経過と現況

製造業に5年間従事した後、経営発展の可能性が高い土地利用型農業に魅力を感じ、平成6年に就農。就農当時は水稲・麦・大豆の作付が10ha程度であったが、作業受託の管理が地域の信頼を得ることにつながり、近隣の耕作地を積極的に受け入れることで、経営規模を増加させていった。平成22年には経営主となり、経営全般を統括するとともに、JA耕種部会に所属するなど、他の農業者との交流を通じ、農業技術や知識の習得に努めている。

##### (2) 生産技術について

水稲においては、成熟期の異なる4品種を作付して作業を分散することで、どの品種においても高品質多収を実現している。また、プール育苗を取り入れるとともに、全量基肥の緩効性肥料を側条施肥することで労力の大幅削減を図っており、飼料用米では平成26年から鉄コーティング籾による湛水直播を導入している。さらに、ほ場管理・労務管理にICT技術（KSAS）を活用し、省力化に取り組んでいる。

##### (3) 労働と生活について

経営規模の拡大に伴い、作業効率・効果の高い機械の整備や資材の工夫により、効率化と省力化を進めて作業への負担軽減を図るとともに、作業員間の意思を統一することで、計画的な作業を行っている。地域の農業者と「下高北部環境保全会」を組織し、地域環境の維持・整備に積極的に参加し、また、平成23年から近隣の生涯学習センターにおいてダンスサークルを主宰し、心身のリフレッシュを図っている。

##### (4) 販売の工夫について

売れる農産物を目指し、特別栽培米の生産に当初から取り組んできた。「あさひの夢」を中心に、「なすひかり」、「とちぎの星」を導入することにより、高品質・多収を実現できるようになった。麦では適正タンパク質含有量を維持できるようにほ場窒素量に注意し、そばについては一部加工を行っている親戚に供給し、製品は道の駅で販売されている。

## ○ とちぎ元気賞（知事賞）

### ◆ 株式会社日光ストロベリーパーク（日光市・園芸）

#### 1 受賞のポイント

日光市として初の観光いちご園に取り組んでおり、インターネット、雑誌の活用や旅行代理店への営業を行うことで幅広い集客を実現している。また、炭酸ガスによるハダニ防除システムや天敵を利用した減農薬等の環境保全型農業に取り組むとともに、ジャムやいちごソースへの加工等、6次産業化にも積極的に取り組んでいる点が高く評価された。



#### 2 経営の特色

##### (1) 経営の発展経過と現況

平成 16 年、「国際観光都市・日光」の地の利を生かした観光農業を目指し、農業試験場で研修の後就農。日光地域の気象に合わせた設備を整え、出荷を開始するとともに、地元への直売やネット販売にも取り組みながら、規模拡大と整備を進めていった。平成 24 年に「株式会社日光ストロベリーパーク」を設立し、さらに入園者の増加に対応するため、休憩スペースや障害者用トイレ・加工品販売スペースを備えた新店舗もオープンした。

##### (2) 生産技術について

管理の均一化と省力化を図るため全棟で自動換気を取り入れるとともに、生産性と品質向上のためハウス内への炭酸ガス施用や、土耕栽培のハウスでは地中加温を行っている。また、平成 18 年から収穫終了後も畝を崩さずにそのまま使用する不耕起栽培を行っており、作業の省力化と土壌の排水性が良くなることで収量の増加や品質向上につながっている。さらに、炭酸ガスによるハダニの防除システムを地域でいち早く導入、天敵も活用することにより環境保全型農業にも取り組んでおり、栃木の特別栽培農作物「リンク・ティ」の認証を受けている。

##### (3) 労働と生活について

収穫や選果など、それぞれの場において作業員が働きやすい環境づくりを行うとともに、作業内容の確認と分担を徹底することで、進捗状況の把握と効率化に努めている。また、パート職員は子育て世代も多いことから、学校行事や家事に配慮しローテーションでの勤務形態としているほか、いちご栽培に加えていちごの無病苗を生産していることから、通年での雇用を可能としており、地域の雇用の場となっている。

##### (4) 販売の工夫について

複数品種のいちごを栽培することで顧客の様々なニーズに対応しており、また摘み取りや直売だけでなく、加工メーカーに依頼しジャム及びいちごソースを製造し、加工品は直売や東京の百貨店を通じてギフト販売も行っている。インターネット、雑誌による宣伝を実施するとともに、テーマパークやホテル等と連携して相互に集客を図るほか、旅行代理店への営業を行うことで年々来園者数は増加傾向にある。

## ○ とちぎ元気賞（知事賞）

### ◆ 舛田 愛 氏・真由美 氏（栃木市・園芸）

#### 1 受賞のポイント

トマト栽培で低コスト耐候性ハウスを導入し、ハイワイヤー誘引による長期多段取り栽培を行っており、さらにはプロファイnderやアグリネットなどの環境モニタリング装置を取り入れ、高単収と安定的な経営を実現している。また、トマト部会において青年部を立ち上げ、部長を務めるとともに、部会員間の積極的な交流を図ることで地域のトマト栽培者の育成や栽培レベル向上に大きく貢献している点などが高く評価された。



#### 2 経営の特色

##### (1) 経営の発展経過と現況

大学を卒業後、トマト栽培の将来性と発展性を見だし、地元農業士の下で研修後、平成10年に就農。平成12年のトマト単価の低迷を機にハウスの高軒高化に着手し、国庫事業を活用しながら低コスト耐候性ハウスを新設、促成長期どり作型を導入することで、単収向上と作業効率の改善を実現していった。綿密な作業計画と適期作業に加え、新技術を積極的に導入することで30 t / 10aを達成し、県内最高水準の栽培技術を有している。

##### (2) 生産技術について

高軒高ハウスでのハイワイヤー誘引による長期多段どり栽培を導入したことで、受光体勢がよく、長期間にわたって安定的に高品質な果実生産を実現している。炭酸ガス発生装置の導入や、細霧装置を用いた飽差管理を行うことで光合成速度の向上を図るとともに、早朝加温やクイックドロップ等の温度管理により果実への転流促進や病害予防を実践している。さらに、プロファイnder・アグリネット等の環境測定装置を導入、ハウス内環境を見える化することで、さらなる収量・品質向上が可能となっている。

##### (3) 労働と生活について

快適で効率的な作業環境を整備するため、積極的な設備投資を行い、勤務時間についてもそれぞれの家庭環境に配慮した体制をとっている。また、管理作業をチーム編成とし、それぞれにリーダーを配置することにより、作業の伝達や進捗の把握等、効率よく作業を進めるとともに、栽培においても病気などを出さない管理につなげている。

##### (4) 販売の工夫について

調理用トマト「シシリアンルージュ」をいち早く導入し、高単価での販売につなげている。また、部会内でも「シシリアンクラブ」を組織し、中玉品種やカラフルなミニトマトなど、新たな品種を作付することで多様な市場ニーズ・消費者ニーズに応えている。さらに、地元トマト部会の青年部において、消費者に対する理解促進・食育活動として、交流やPRを行っている。

## ○ とちぎ元気賞（知事賞）

### ◆ 稲葉 一重 氏・厚子 氏（小山市・畜産）

#### 1 受賞のポイント

和牛経営において牛のストレスを軽減する徹底した飼養管理と、生育に合わせた給与体系や代謝プロファイルテスト等の新技術の導入により、高い生産性と安定した収益性を実現している。また、県のリーディングブランド「とちぎ和牛」及び、市のブランドである「おやま和牛」の地産地消推進のため、料理教室の開催や学校給食・レストランへの食材提供など、販売力・ブランド力の強化に積極的に協力している点が高く評価された。



#### 2 経営の特色

##### (1) 経営の発展経過と現況

昭和 50 年に高校卒業と同時に就農。就農当時は、養蚕、かんぴょうなどの複合経営であったが、小山市内で生産が盛んだった黒毛和種肥育牛部門を開始し、畜産振興資金や自己資金で肥育牛舎を増築、徐々に頭数を増やし、和牛肥育牛専業経営とした。また、関係機関等と連携しながら、よりおいしい和牛生産に向け、枝肉重量・肉質を重視した「売れる枝肉 俵牛づくり」に取り組んでいる。

##### (2) 生産技術について

牛が健康に育つよう、ストレスのない環境を整えるとともに、飼養環境の改善に積極的に取り組んでいる。十分な枝肉重量と良好な肉質（バラ厚、ロース芯面積）を確保するため、牛の生育に合わせた徹底した精密飼養管理により、高い生産性と安定した収益性を実現している。また、肥育月齢に応じた血液検査（代謝プロファイルテスト）を経時的に調査し、発育や肉質の実態把握に努めている。さらに、ブランド強化を図るため、肉の味と密接な関係のある脂肪酸組成について、所属部会及び県機関と連携し、実態調査を行っている。

##### (3) 労働と生活について

経営管理はパソコンを導入することにより肥育素牛導入や資材購入、飼養管理の整理に活用し、また、労務管理はゆとりある作業を目指して経営主とパートナーとの役割を明確にし、毎朝作業開始時に作業内容の確認を行っている。耳標を装着することによって個体管理を容易にし、導入から出荷までの計画が管理可能となっている。

##### (4) 販売の工夫について

枝肉共励会に積極的に参加し、枝肉から飼養管理状況の確認を行っている。また、市場が求めているもの（顧客ニーズ）をリサーチするため、肉卸売問屋との情報交換により枝肉生産の様々な情報を収集し、販売対策の参考としている。さらに、地域のブランドである「おやま和牛」の地産地消推進のため、JA主催の料理教室、JAまつりにおける和牛の販売及び、小山市畜産協議会主催のバーベキュー等、PR活動にも積極的に協力している。

## ○ とちぎ元気賞（知事賞）

### ◆ 倉井 隆史 氏（下野市・複合）

#### 1 受賞のポイント

土地利用型作物に加えごぼう、だいこん、にんじんなど、年間を通し様々な品目や作型の組み合わせにより安定した作付け体系を確立し、複合型農業の模範となる経営を実践している。また、完熟鶏糞を有効に活用した土作りと減化学肥料栽培、地域の生産者と連携した耕作放棄地解消のための地域活動を行うなど、環境保全型農業に積極的に取り組んでいる点が高く評価された。



#### 2 経営の特色

##### (1) 経営の発展経過と現況

子供の頃から農業に期待と憧れを持っており、平成16年に就農、当初の主な作目は米麦、かんぴょう、薬用作物であったが、初期投資が少なく、需要も多かっただいこんの作付を開始した。遊休農地を中心とした畑の農地借用により、だいこんの規模拡大を図るとともに、作業の効率化のため機械の大型化を進め、さらに、だいこんの作業がない時期を活用してにんじん、ごぼうを新たな品目として導入した。現在では、ゆとりのある生活を実現するため経営を見直し、だいこんに代わり1年を通して栽培できるごぼうを主力作物としている。

##### (2) 生産技術について

複合型栽培である点を活かし、麦藁のすきこみや輪作体系を確立することにより、土づくりを積極的に行うとともに、近隣の養鶏場から出る完熟鶏糞を有効に活用することで、化学肥料を極力減らすことに努めている。このことにより、ごぼうや小麦では化学肥料を使用しないなど、環境保全型農業につながっている。

##### (3) 労働と生活について

農業と家庭生活を分け、ゆとりをもてるよう、作業スケジュールを組み立てて露地野菜の面積や品種を考慮し、労働を分散できるようにしているとともに、農作業についても地域内の若手農業者と協力して、田植えや収穫、ビニールの張替えなどを共同で行っている。また、地元の「橋本地区農地を守る会」に参加し、畑地を借り受け、地域から耕作放棄地をなくすための活動も行っている。

##### (4) 販売の工夫について

だいこんやにんじんはサイズによって袋詰めのコテナ出荷により付加価値を高め、直接市場出荷している。ごぼうについては、自らが中心となって出荷規格や出荷箱等について協議を重ね、有利販売につながっている。また、うどん用小麦「イワイノダイチ」は契約栽培するとともに、一部は自ら製粉し、地元飲食店に直接販売している。さらに、平成27年からは新たに酒米生産にも取り組み、直接酒造会社へ販売している。